

4 イエメン

ターバンとヤーバーン

佐藤 寛

エ ア ポ ー ト ・ 「アラブの田舎」イエメンの首都サナアは海拔二三〇〇メートルの岩がちな高原に位置する。サナア空港は日本の地方都市のバスターミナル程度の規模のさびれた空港で、乗り降りには当然タラップ、歩いてもしけるターミナル・ビルまでバスで乗客を運ぶのは精一杯のサーピスである。空港につきものの便名・時刻が「パタパタ」変わって表示するボードなどない。トランクの中身をひっくり返すような念入りな

入国時の荷物検査を終えて外に出た時、あなたが最初に目にするものは、頭にターバンを巻き、むこうずねまでの長さのワンピースを着て、その上に背広の上着を着込み、腰には幅一〇センチほどのベルトを巻きつけ、へその前に丁字型の鞆に入った半月刀（ジャンベリア）をさした無愛想な男たちがうろろしている光景である。あるいは上半身は普通のシャツ、下半身は腰巻き布でやはりジャンベリアをさしているといういでたちもかなり目にする。この二つがイエメン男子

の普段着の典型的なパターンである。西洋風にズボンを履いてシャツを着ている人もいないではないが、このスタイルではジャンプは似合わないの、あまり人気がない。

ワンピースにジャンプアスタイルの人は荷物検査の係官や、荷物の積みおろしの作業員にもいるので、外見だけではそれが役人でそれが通りがかりの人はわからない。ビルを出たところで「タクシー?」「タクシーはいらんかね」と寄ってくるタクシーの運ちゃんは大抵この格好である。初めてイエメンに降り立ち、いきなりこのスタイルを目にするとちよつとした衝撃を感じることが出来る。途上国でも服装の均一化が進む昨今、こうしたカルチャー・ショックを与えてくれる空港は減ってきているが、サナア空港は数少ないそうした空港の一つである。

普段着はある意味で生活のなかの合理性の固まりだし、社会と経済のありようの縮図であるから、最初に見たときは不合理、ナンセンスなもの、「異形(いぎょう)」の固まりとして眼に飛び込んできたイエメン男の服装も、住んでいるうちにそれぞれのパーツについて「これ以外の服装は考えられない」と納得するようになるものだ。

ワンピースと背広

まずワンピース、断っておくが男性用である。これはアラブ世界のかなりのアラブ世界ではディシュダーシャ、ガラベイヤ、ザンナなどと呼ばれ、地方により、人により呼び方は一定していない。ソウブとは本来のアラビア語では「衣服」一般を意味する言葉である。平均的日本人なら「アラブ」といったときに頭から白い布をかぶってその上に黒いわか(イ

カール)を載せ、だぶだぶのワンピースを着て立派なあご髭をはやしたでっぴりしたアラブ湾岸諸国の石油成金の姿を想像するかもしれない(中東に駐在してゐる日本人はこれを「オバQ」スタイルと呼んでゐる)。色や、衿回りの形、袖の形状などはアラブ世界のなかでも国により、また本人の趣味によつてかなり違うが、イエメンのソウブもヨルダン、エジプトなどの農民服もワンピースという点では基本的にこれと同じである。

暑いのになぜわざわざ長袖を着て、くるぶしまで覆わなければならないのかと思うかもしれないが、実際にこれを着てみるとゆつたりして皮膚との間にかんりの空間があるので身体に適度に風が入ってくるし、乾燥して痛いほどの灼熱の太陽の下では肌の露出が少ないほど涼しいのである。ズボンよりもスカートが楽なのと同じ理屈である。下着はランニングシャツとパンツのみだが、ステテコのような下ばきをはくこともある。

ワンピースの色は湾岸諸国は白だが、イエメンでは白は晴れ着、よそ行き用として用いられることが多い、日常よく使われるのは茶色、ベージュ、紺など汚れが目立たない色である。また湾岸諸国では生地は薄手の綿、シルクなどだが、イエメンではやや厚手の化繊が多いのは経済力の差と労働の内容の違いを反映してゐる。

ソウブにはワイシャツのような衿がついてゐるが、おしゃれな人はスタンドカラーにする場合もある。前みごろはへその上まで開いていてボタンがついた、いわゆるプルオーバーである。袖は通常長袖で、袖先はボタンがついてゐる場合が多いが、安物は筒袖である。カフスがついてい



イエメン山岳部のちょっとすましたお出かけ風景。右肩に掛けているライフルは外出時の必需品

「いったい、誰がどうやって持ってきたのだろうとかねがね疑問に思っていたが、ある時サナアの友人が日本の僕の職場にひよっこり訪ねてきた。「何しに来たの?」「古着を買いに来た」。英語のしゃべれない彼のために僕はしかたなく古着問屋に電話するはめになった。イエメン人

るのはサウジアラビア・湾岸の金持ち用である。たまに半袖のソウブもある。イエメンでは、いつの頃からかこのソウブの上に背広の上着を着ることが常識になっている。これは他のアラブではあまり見かけないスタイルである。イエメンは山岳地が多く、朝晩かなり冷え込むからであろう。農作業中はソウブのみだが、出かけるときは背広(コートと呼ぶ)を着るのが本式である。サナア旧市街のストーク(市場)の入口で頭の上はこの上着を三十枚くらい重ねて売っている上着売りたちはちょっとした見ものである。彼らの頭の上にあるのは古着で、裏ポケットの所に鈴木とか加藤とかいうネームが入っているのを見かけて驚くことがある。日本から流れてきているのだ。

「はこうやって日本から古着を調達するのだ。その時知ったことだが、今では日本に古着輸出屋さんは一〇社ほどしかなく、その大半は大阪にあつて、東京近郊には三軒くらいしかない。電話をかけて問い合わせると「品薄でとても中東にまで回せない」「今あるものはフィリピン向けが主である」、そして「香港あたりに行けばあるかもしれない」ということであつた。

「ところで何でわざわざ日本から輸入しようなんて思つたんだい」と友人に尋ねると「今イエメンに來回つてゐるのはヨーロッパからの古着が多いが、イエメン人にはサイズが大きすぎる。日本のものは仕立てもいいし、サイズがイエメン人にちょうどいいんだよ」と説明してくれた。なるほど、イエメン人はアラブ人のなかでは小柄で痩せている人が多い。日本から輸入したい物は車やラジカセばかりではないのである。

腰巻きあれこれ

イエメンのなかでも南部、それに紅海、インド洋沿岸の低地に行くとソウブ・スタイルより腰巻きが多くなる（ただし、地域によってソウブ・スタイルと腰巻きスタイルがはっきり分かれてゐるわけではない。あくまで程度の問題である）。海に近くほど湿気、暑さが激しくなるので上半身裸になつたり、Tシャツなどを着た方が快適だからだろう。腰巻きには縫い目のないただの一枚布（マアワズ、あるいはスマータなどと呼ばれる）と、縫い合わせて環になつてゐるもの（フータと呼ばれる）がある。アデン、ハドラマウトなど旧南イエメンではフータが一般的である。サナアを含む旧北イエメンでは一枚布を巻き付ける場合が普通（腰の回りをおよそ一回り半するほどの長さである）だが、昼間は一枚布の人でも、夜寝ると

きはフータにする人が多い。

いずれの場合も基本的に布を外側にたくし込むことによって留めるだけだが、上手に巻けば決してずれたり外れたりすることはない。裾は膝と踝の間くらいまでで、ソウブよりも短かめである。肉体労働の場合は、股を十分開くことができるので腰巻き布の方が活動的である。ソウブ・スタイルは役所の課長・局長クラスにもよく見かけるが、腰巻きスタイルが役所の要職の人あまり見かけないのは、労働着としての性格が強いからだろう。

一枚布はやや厚手で緑、紫、茶などの濃いめの無地、または細かい格子柄程度のシンプルなもの、裾に当たる部分に帯状の刺繍がある場合が多い。一方、フータの方は薄手の生地で緑、茶などの地に大きめの柄がプリントしてある場合が多い。

サナアのスークに腰布を買いに行く。ちよつと気のきいたデザインやしつかりした生地のものはたいてい輸入品である。どこ製の布がいいのかと店の人に尋ねると即座に「インドネシア」という答が返ってきた。雑貨などでは中国製の安物をよく見かけるが、サナアで買える東南アジア製の品物はこの腰布とタイガーバーム軟膏だけである。腰巻きスタイルが中東起源なのか、アジア起源なのかは知らないが、ともかく腰布はイエメンと東南アジアの交流の歴史を反映しているようだ。

あまり知られていないが、ハドラマウトやオマーンの人々はいずれもインド洋をまたにかけて活躍した歴史を持っている。現在の東南アジアのアラブ系の家系はほとんどハドラマウト出身だ

し、東アフリカのザンジバルはかつてオマーンの植民地であった。これらの地域の間には今でも人々の交流があり、イエメンでインドネシア製の腰布が普及しているのは東南アジア帰りのイエメン人が持ち帰ったのがきっかけであろう。シンガポールのアラブ人街に店を構えているパティック屋のなかにはイエメン人が結構多いのである。またイエメンの腰布の巻き方とマレーシア、インドネシアの腰布の巻き方はおおむね同じだし、東アフリカの腰布もどうやら同じようである。インド洋はシンドバードの冒険談に象徴されるように、かつてアラブの海であった。そしてそれは今日イスラム教と腰布に痕跡を残しているのである。

タ ー バ ン

ところでイスラムといえば、かぶりものが重要である。日本の辞書で「タール」と書いてあるくらいである。確かにアラブ、イスラム世界では頭布（あたまぬの）あるいは、帽子は身繕いに不可欠な要素である。

アラブの頭布で有名なのはP.L.O.のアラファト議長のとレードマーク、白と黒の格子模様の布だろう。イエメンにも同じ柄の布があるが、色は赤と白の組み合わせの方がポピュラーである。シヤールと呼ばれるこの布（頭布は他にもマシャッタ、オトラなどという呼び方もされる）のサイズはおおむね一メートル四方の正方形で、それを対角線で折って直角二等辺三角形にし、底辺を額にあてて巻き付ける。この巻き付け方、布のサイズと模様（格子模様以外にもさまざまな色、柄がある）は部族ごとに異なっていると言われ、シヤールを見ればどこの部族（イエメンには六〇〇以上

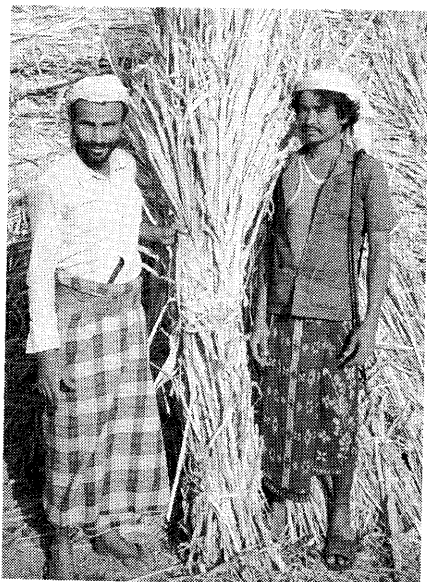
の部族があると言われる)の出身かわかるといふ説がある。部族の名前まではわからないが、確かにシャルルの柄で北部の出身か南部の出身かくらいは僕でもわかる。

前述の「オバQスタイル」では頭に乘せるのは白い布である。この場合の布はシャルルよりも一回り小さい。このかぶり物は湾岸諸国の正装である。ただしオマーンでは頭の上にイカール(黒いわつか)はなく、白い布を頭に巻きつけるだけである。またヨルダンではイカールを用いるが、布の色は白一色ではなく赤と白の格子模様である。これに西洋風のズボンとネクタイといういで立ちはヨルダンに特有で、フセイン国王もしばしばこうした格好であられる。

しかし、容易に想像がつくように頭布をわつかで留めるスタイルは決して活動的ではない。冷房の効いたオフィスにふんぞりかえって書類にサインするだけ、タクシーを運転して町中を流しているだけならいいが、畑を耕そうとかロバに乗ろうとかいう時にはすぐずれてしまうし、屋外で風にさらされたら簡単に飛ばされてしまう。だから農業国であるイエメンではわつかを頭にのっけている人は皆無であり、皆しっかりと頭に巻きつけている。

多くのイエメン人はソウブ・スタイルにせよ、腰巻きスタイルにせよ、通常頭布を身にまとっている。頭布を持たずに出かけるのはどうやらパンツを履かないのと同じくらい不自然なことらしいのだ。だからわれわれ外国人も試みに頭に巻いて出かけてみる。

身につけてみるとこれほど重宝なものには滅多にない。まず第一に日よけになる。アラビアの日中の陽射しを頭に直接受けければ、日射病になること請け合いです。シャルルは後頭部まで覆う



イエメン低地部の労働者。腰巻とサンダルは定番。上着は湿度・温度に応じてランニングTシャツ、ワイシャツなど。背景はキビの茎（家畜の飼料用のスーク [市場] にて）

敷けば被害が少ない。第七に喉が乾いているのに飲み水が無い時、水たまりがあれば水濾しに使うこともできる（これは実践したことは無いが）。ついでに、ヤールを手にしたら二度と手放すことはできないだろう。一度シ

ヤールを頭布としてではなく、ファッション・アイテムとして用いることもできる。これは都市のファッションであるが、白いソウブに黒っぽいジャケットを着て、その上に肩からシャ

ので日よけとしては完ぺきである。第二に高原気候で朝晩冷え込むサナアではシャールは防寒具としても必需品である。第三に昼間砂ほこりの多い町なかを歩くときには砂よけになる。第四に手を洗ったときにはシャールの端で手がふけるし、その気になれば鼻もかめる。第五に野菜など大きな買い物をしたときには風呂敷になる。第六に旅行に出かけて南京虫がいるベッドで寝るときにはシーツ替わりに

ル（この場合は黒白か、赤白の格子に限る）をショールのように巻きつけるのはなかなかの伊達姿である。両端は胸のところで結び、後ろから見ると背中中に逆三角形ができる。これは現在役所の若い高官や、インテリ学生が好んでいるスタイルである。

このシャールをやはりスークに買いに行く。格子模様にもいろいろあって、プリントしたものはいエメン製である。格子を刺繍してあるものは高級品で、そのなかでも縁にぐるりと白い房がついているのが最高級である。いエメン製にしては仕事細かいのでどこ製だと尋ねたら、答は「ヤーバーン」であった。日本である。

調べてみるとどの店でも最高級品は大阪のあるメーカーの作ったものであった。最近では中国製のものと同じブランドで売られているが、まがいものかあるいはこの大阪の会社が人件費の都合で中国に工場を建てたのだろう。同じ品でも「ヤーバーン」製のほうが「シーニー（中国）」製よりも値段が高いのだが、人々は日本製を好んで買っていく。

二十世紀の後半である。世界市場を席卷したメイドインジャパンの車、テレビ、ラジカセ、時計、発動機などが「アラブの田舎」いエメンにまであふれているのは、いたしかたない。日本人が二〇人そこそこのこの町で日本製品の氾濫を見、いエメン人から「ヤーバーン・タマム（日本製品はすばらしいよ）」と言われるのは、正直それほど悪い気はしない。しかし、ターバンまでも。イスラム教徒につきもののものであり、身体のかなで最も大事な頭を包むものであり、その巻き方でアイデンティティーが示されるという、伝統衣装の中核とも言えるターバンである。

こちらが日本人とわかって「ヤーバートン・タマーム」と言ってくれた布屋の主人のおだてに、このときばかりは素直に乗る気はしなかった。普段着は社会と経済のありようの縮図である。

(さとう ひろし／アジア経済研究所経済協力調査室)